

道路維持管理 編

[登壇者] 和泉 公比古
首都高速道路(株) 常務執行役員

世界で最も過酷に使われている道路、ずばりそれは「首都高速道路」ではないだろうか。首都高速道路は、1日あたり約110万台を超える車が通行しており、首都圏の交通ネットワークを支えている。そこに、人びとの安全を守るために、維持管理に取り組むスゴ腕技術者が存在する。今回は道路維持管理のスペシャリスト、和泉公比古氏の信念に迫る!

腕 現在に至るまでの経緯

子どものころからものづくりが好きだった和泉さんは、大きなものをつくりたく、土木の道へ進んだ。名古屋大学卒業後、1973年に首都高速道路公団に入社。当初は建設部門に従事。かつしかハイブリッド橋を担当。入社9年目にフランス留学の機会を得、そこでフランスの優れたプレストレストコンクリートの技術や構造物の維持管理の実態を学び、維持管理の重要性を心に抱くようになった。帰国後、5号池袋線三園のPC橋、レインボーブリッジなどを担当した後、保全部門に従事。1997年、3号渋谷線の池尻付近の鋼製橋脚隅角部に進展性のき裂損傷が発見され、その後の一斉点検により首都高全線で同様の損傷が570基に見つかった。待たなしの状況、かつ前例のない事態に、有識者と議論を交わし、補強板を設置することで解決した。そんな偉業を達成できたのも、目ざらぬ現場に行くことを大切にしているからだ。現場に行かないと、き裂や音、揺れなどがわからない」と和泉さんは語る。現在は、損傷事例や対策事例をデータベース化し、マネジメント

手法を用いて予防に努めている。

腕 1日でも早い復旧のためにどうすればよいのか?

2008年8月、首都高5号池袋線熊野町でタンクローリーの火災事故が発生した。この事故の影響により、一部区間で通行止めが行われ、各所で大渋滞が発生した。「事故直後に現場に駆けつけたときには、大変なことが起こったとは思ったが、1日でも早く復旧するにはどうしたらいいのかとすぐに考えた」と和泉さんは当時を振り返る

た。和泉さんは全体目標として「1日も早い復旧」、現場においては「スピード」と「チームワーク」というキーワードを掲げて復旧に取りかかった。その結果、最低でも半年は必要だといわれたところを、73日間という短期間で完全復旧を実現させた。「スピード」に関しては、鋼材の手配が早くできたことが第一の要因である。さらに工事着手後に、現場の状況に合わせ次々と工程短縮の案を出したそうだ。「チームワーク」に関しては、情報共有の場として工程会議を頻繁に行った。和泉さんによると、「多くの工種を多くの施工会社が担当するので注意を払った。そのため工



写真1 首都高速道路の説明をする和泉氏



写真2 現場における取材風景

いずみ・きみひこさん

1950年、愛知県名古屋生まれ。1973年名古屋大学工学部卒業後、首都高速道路公団に入社。神奈川管理局保全部長、保全・交通部長、西東京管理局長、執行役員を歴任。現在、常務執行役員(保全・交通部門)、日本道路協会橋梁委員会維持管理小委員会委員長、プレストレストコンクリート技術協会理事。61歳。

程会議は非常に重要だった」「現場によく足を運び、現場の最新状況を把握することで、何とか成し得たものだ」と語る。しかし、同時に「警察や関係する道路管理者の方々の全面的な協力が得られたからこそ」ともいう。土木はチームプレーだ。これは日ごろから人のつながりを大切にしている和泉さんだからこそ、成し得たものなのだろう。また、迅速果敢な人は、周囲から信頼される。和泉さんのように信頼を得るには、日々起こるあらゆる問題に対して全力投球し続けることだと思った。

腕 スゴ腕技術者の学生時代は、スポーツマン!

そんな和泉さんは、大学時代は野球部に所属し、毎日練習に励んでいたそう。おかげで体が丈夫になり、通る声が出るようになったと言う。現在は通常8時半には出社し勤務しているが、緊急事態が発生した場合はどんなときでも電話一本で出向く。そのまま事態が落ち着くまで働き通すこともあるそうだ。和泉さんは、「休みもあつてないようなものだが、それが平気なのも学生時代に鍛えた身体のおかげだろう」と振り返る。学生時代に学んだ知識ももちろんだが、それ以上に、鍛えた体が

生かされていることに驚いた。

また、休日は家族と旅行することが楽しみと言う。その際は車移動が多く、他社のあらゆる道路状態が気になるそうだ。他社の維持管理状況を観察することにより、自分が行っている維持管理を客観的に評価している。自分のテリトリーのみではなく、幅広い視点で客観的に観察することが大切だと思った。

腕 あらゆる構造物を長持ちさせたい

東日本大震災により、首都高速湾岸線のトラス橋(荒川湾岸橋)で部材接合部のガセットプレートが変形、破断した。地震発生時は耐震補強工事中だったため、すでに足場が設置されていた。おかげで復旧工事に早急に取りかかることができ、荒川湾岸橋はわずか11日間で復旧した。和泉さんは、「構造物の耐震性を高めておくことの必要性がさらに増した。道路は地震時の緊急交通路、物資輸送路として用いられるため、現在実施している耐震補強をさらにピッチを上げて取り組まなければならない」と話す。さらに、「今後も維持管理の重要性を唱えて、積極的な対応であらゆる構造物を長持ちさせたい」と夢を語った。その夢を叶えることで、幅

広い社会への貢献につながる。その具体的なビジョンについて語る和泉さんに、真の土木技術者の姿を見た気がした。

腕 取材を終えて

「失敗は何度もしたが、挫折はしたことがない」と言い切る姿に、常に前向きで真面目な人という印象を受けた。日ごろから強いチャレンジ精神を持っているからこそ、どんな困難が来ようとも挫折しないのだろうと思えた。維持管理の仕事をするにあたっては、きつとそれが必要不可欠なのだろう。「案外地味な仕事なんですよ」と言う和泉さんは、それでもどこか楽しそうな顔をしていた。

学生編集委員 篠崎真澄、辻本剛士

今月のスゴ腕技術者からの一言

「何をしたいのか? という問いかけを自分にし、自分なりに目標を持ってほしい。目標ができたら、実現するために何をすればよいのかを順々に考えればよい」、「若いうちはいろいろなことにチャレンジし、またスポーツなどで体を鍛えておくとよい」と和泉さんは語る。すべて実体験に基づいているため、非常に胸に響くメッセージだ。